

審判講習会 参加報告書

平成31年1月6日
報告者 永易 貴史

この度参加しました、審判講習会について報告します。

講習会名 (大会名)	第36回全関西中学生バスケットボール交歓大会
参加者 (報告者)	永易 貴史 (中予中体連)
期日	平成30年12月27日 (木) から平成30年12月29日 (土)
会場	広島県立総合体育館
講師	蒲 健一氏 (公財) 日本バスケットボール協会 指導委員
参加者	派遣審判員・地元審判員
報告①	<p>■ゲーム 12月27日 (木) Fコート 12:00～</p> <p>【京都精華 対 倉吉西】 (男子)</p> <p>CC 永易 貴史 (報告者) U1 藤 潤次 (広島県C級)</p> <p>コート主任 廣末 彰夫 (広島県)</p> <p>1Qから京都精華がオールコートDFで始まり、攻守の切り替えが連続して起こる。ドライブに対する京都精華の手の使い方についてハーフタイムでクルーでの確認をした。ゲーム後のカンファレンスにおいても、コート主任より1Qで基準となる判定をしてテンポセッティングをするべきであったのではないかと。ゲーム後半に主力選手から控え選手に交代された。判定基準を下げるのではなく、悪い手やディフェンスの受け方など明確に取り上げてあげることで、控え選手に何が必要なのかを伝えてあげるのも良いのではと助言いただいた。</p>
報告②	<p>■ゲーム 12月27日 (木) Fコート 14:30～</p> <p>【戸坂 対 上宇部】 (男子)</p> <p>CC 永易 貴史 (報告者) U1 今野 大輔 (広島県C級)</p> <p>コート主任 望月 真澄 (広島県)</p> <p>両チーム共に悪い手が多く、リーガルガーディングポジションが取れておらず、1Qからファール、フリースローが続いた。前半終了時で隣のコートより7～8分遅れる。メンバーが交代した後半になってもファールが減らずにゲームが長くなる。さらに度々のメンバーチェンジ、点差が開いていてもタイムアウトなどが多かった。コートの出入りを早くするように促すなど、少しでもゲームがスムーズに流れるように努めた。ゲーム後のカンファレンスでは、影響の少ない軽いファールを多く取り上げてはいなかっただろうか。もう少し流して遅れてからのコールでも良い場面もあるとの助言をいただいた。</p>
報告③	<p>■審判研修会 12月27日 18:30～ 中研修室</p> <p>講師：蒲 健一氏</p> <p>『説得力のある判定をする為に』～2PO・3POメカニクスとIOTの共通理解</p> <p>2PO、3POのどちらにおいても重要となる、IOT(Individual Officiating Technique)について動画や図を交えながら説明いただいた。</p>

<p>報告③</p>	<p>1.ステーションナリ&ディスタンス 静止した状態から適度な距離感で判定を行うこと。ハイトレイルであったり、リードがずっとセットアップポジションにいるなどは良くない。</p> <p>2.レフェリーディフェンス ディフェンスがイリーガルかどうかを判断する。オフenseの背中を見ない。それを意識したポジション取りや、アングルを取る。</p> <p>3. 45°とオープンアングル 身体の向きを45°にする。トレイルの場合は視野の右端から左側にアングルを取る。誰をフォーカスし、誰をヴィジョンに入れるのかが大切。</p> <p>4.ステイ・ウィズ・ザ・プレイ ステイしてプレイを捉える。捉えているプレイが終わるまでステイする。笛を急ぎすぎず、ファウルがあれば、ファウルの絵ができるまで確認する。</p> <p>5.コール・ザ・オヴィアス 明らかなものを積み重ねていく。ゲームをコントロールしていく上で重要な要素である。明らかなインパクト、ゲームの中で重要なコンタクトを確実に取り上げる。プレイヤー、コーチにメッセージし、何が判定として記録されているか。</p> <p>6.アクティブ・マインド・セット 常にイリーガルなアクションを探していくメンタルと実践が必要である。オフボールでもプライマリエリア内にまずはアクティブなマッチアップがないかを把握しておく。</p> <p>7.プレゼンテーション 鏡の前で自分で確認しながら練習を行うなど、より良いプレゼンを磨くことが大切。判定への信頼度にも繋がる。常にシャープに。テーブルレポートの後に下を向かず堂々で行うと良い。ボイスを活用していく。歩く姿、立ち姿、走る姿だけではなく、ハーフタイム中も見られている意識を。コーチやプレイヤーなど対象となる相手との距離や向き合い方も大切。たとえそれまでの判定が正しかったとしても、信用度を一気に失うことにもなり得る。</p> <p>8.テーブルレポーティング 何が起きたのかを忠実にレポートする。スコアラーとのアイコンタクトも必要である。</p>
<p>報告④</p>	<p>■ゲーム 12月28日(金) Aコート 9:30~ 【石井 対 佐賀城東】 (男子) CC 永易 貴史 (報告者) U1 高橋 竜太郎 (京都府B級) コート主任 杉山 栄規 (京都府)</p> <p>両チーム共にディフェンスがクリーンであり無理はしないチームであった。オヴィアスなものについて確実に取り上げることでテンポセッティングができ、落ち着いたゲームが展開された。両チームともに得点を重ねるが一進一退で点差は離れず、非常に見応えのある白熱したゲームになった。スローイン時のDFの身体の向きについてベンチからアピールがあったが、コミッショナーを置かないゲームであったため、レフェリーとしては特に関知せずゲームを進行させた。</p>

報告④	<p>ゲーム後のカンファレンスでは、前半からファールの基準も明確に示しており、点差の割に落ち着いたゲームにできていた。中盤に少しゲームが荒れそうな時間帯があった。それを感じ取り、適切な笛を入れていけたかもしれない。プレゼンテーションについて、より信頼を得るためにも鏡を見ながら練習した方が良いと助言いただいた。</p>
報告⑤	<p>■ゲーム 12月27日(木) Bコート 12:00～ 【西福岡 対 平城東】 (男子) CC 望月 公平 (広島県A級) U1 永易 貴史 (報告者) U2 教誓 祐二郎 (広島県B級) コート主任 鷲見 勇樹 (広島県)</p> <p>プレゲームカンファレンスでは、CCの資料をもとに次のような点について確認を行った。①プライマリエリアの確認、②ローテーション、③ベーシックメカニック、④クルーワーク、⑤プレゼンテーション 特にクルーワークでは、アイコンタクトやハンドシグナルでの情報の共有。EOQ,EOGの確認(4.9秒以下はC)。プレスディフェンス時にCサイドがアクティブな場合の協力について時間を取って共通理解した。</p> <p>ゲームは最後まで西福岡のペースで進んだ。西福岡の激しいDFの中でも、悪い手などは確実に取り上げることで基準を早めに示すことができた。CC中心にクルー同士のコミュニケーションを取り、それぞれのプライマリを責任持って判定することができていた。2Qにレフェリーに当たったことをアウトオブバウンズ判定にしたことについて、ベンチからアピールがあってゲームの進行が止まることがあった。サイドラインをまたいで外側にいたレフェリーに当たっていたため、アウトオブバウンズの判定であるとその場で明確に説明できなかったことによって、信頼感を損ねる結果になってしまった。今後は根拠を持って判定し、明確に説明できるレフェリングをするための教訓にしたい。</p>
所 感	<p>これまで2POで行われてきた地区大会においても、準決勝、決勝については3POで行われるように変わってきており、B級審判員に求められる役割も変わってきています。ルールやガイドラインも度々改定され、自らでの新しい情報を求めて自己研鑽を求められています。今年度より新規B級として経験の幅を広げたいと思い、大学など別カテゴリーへの派遣依頼にもできる限り参加してきました。今回初めて全関西大会という多くの県からの審判員が集まる大きな大会へ参加することで、良い刺激を受けることができました。今回特に感じたのは、他県の審判員との判定基準をすり合わせるため、プレゲームカンファレンスやゲーム中のコミュニケーションの重要性です。1Qでのテンポセッティングから一貫性のある説得力ある判定をしていくことが大切であると感じました。審判研修会での講話では、「アクティブ・マインド・セット」「プレゼンテーション」について非常に参考になりました。学んだ事を日々の審判活動で実践しながら身につけたいと思います。</p> <p>この度、全関西大会に関わった関係者の方々に深く感謝申し上げます、私の報告とさせていただきます。本当に有難うございました。</p>